

丸山眞男と音楽

撰 正弘

ばるらんど記事の題材に困って
書庫を歩いていたら、『丸山眞男
音楽の対話』という本が目にとまり
ました。「丸山眞男」と「音楽」とい
うのが意外な組み合わせでしたの
で、興味を持ちました。

政治学者の丸山眞男さん（19
14-1996）の文章と初めて出
会ったのは、たしか高校の国語の
教科書の中だったと思います。「で
ある」「ことと」「する」「こと」とい
うのもともと講演の形で発表されたも
のに修正を加えた文章でした。せつ
かくの機会ですので、「である」「こ
とと」「する」「こと」（『日本の思想』（請
求記号●J56-074など）に収録され
ています）を読み返してみました。

この文章は、いろいろな具体的な
例を挙げながら、だんだん本日の
テーマをはっきりさせて行くとい
う仕方だ（『日本の思想』154頁）
展開されていきます。

例えば、丸山さんが学生時代に
民法の講義を受けた際、「時効」制
度について次のように説明された
そうです。自分が債権者「である」
ということに安住し、請求「する」
ことよって時効を中断しないな
らば、最終的には債権を失ってし
まう、と。同じような例として、
日本国憲法第十二条「この憲法が
国民に保障する自由および権利は、
国民の不断の努力によってこれを

保持しなければならぬ」という規
定も取り上げられています。

その他、「である」価値の説明の
ために徳川時代における身分関
係を例示したり、「する」価値の説
明のために経済や政治の領域な
どに言及しています。この文章は
半世紀以上前に書かれたものです
が、丸山さんが伝えようとしてい
るメッセージの大部分は、いま読
んでも古びていないように思いま
した。

余談が長くなりました。『丸山眞
男 音楽の対話』に戻ります。この
本は、丸山さんと教え子である著
者との私的対話をもとに書かれて
います。なかでも、作曲家ヴァー
グナーと指揮者フルトヴェンゲ
ラーの話題が軸になっています。
ヴァーグナーに関しては、丸山
さんが壮年期を過ぎる頃までは好
みではなかったようです。理由の
一つは、戦前のSPレコード（片面
4分程度）ではヴァーグナーの長
大な作品を扱えなかったというこ
とです。もう一つは、ナチス・ド
イツが盛んに担いでいたという事
実や思想的背景が関係しているよ
うです。ところが、1962年8
月にバイロイト音楽祭で「ローエン
グリン」を観たことがきっかけで、
ヴァーグナー嫌いは音を立てて崩
れ去ったそうです。

丸山さんはフルトヴェングラ
ーを終生敬愛していたようで、フル
トヴェングララーに対する思い入れ
や、実演に触れられなかった無念
など、多くのエピソードが綴られ
ています。ただ、それだけの愛情
がありながらも、戦時中のフルト
ヴェングララーの行動に関しては批
判的な意見を述べています。彼が
ドイツに留まって指揮を続けてい
るといふ事実がナチスの文化政策
にとつて欠かせなかつたという事
実や、自分の政治的立場を理解し
て、それなりに行動してほしかつ
たという意見です。

ここには書きませんが、丸山さ
んの「好きな曲 尊敬する曲」が、
『丸山眞男 音楽の対話』の49〜52
頁で簡単に紹介されています。ご
興味のある方は資料をお借りに
なつてください。

タイトルからして音楽だけに焦
点を当てた本かと思いきや、専門
分野（政治学、日本政治思想史）の
断片にも触れられていました。自
らの専門分野と音楽との間を往復
した方ならではの、独自の視点を
持っていると感じました。

紹介する資料

●中野雄『丸山眞男 音楽の対話』文藝春秋
1999（請求記号●C63417）

●丸山眞男『日本の思想』岩波書店、1961（請
求記号●J56-074など）